

令和6年度 麻生区市民提案型協働事業 審査委員会 議事要旨

- 1 開催日時 令和6年4月15日（月）14時00分～16時30分
- 2 開催場所 麻生区役所4階第6会議室（公開プレゼンテーション 第1会議室）
- 3 出席者 [委員] 小倉委員長、本間委員、俵委員、岸委員
[事務局] 田島課長、森下課長補佐、市川担当係長、川久保職員、高木職員
- 4 傍聴者 1人（公開プレゼンテーション）
- 5 議 事

（1）審査委員会事前説明（13時45分～14時00分）

- ・事務局から進行及び提案事業の内容について説明

（2）公開プレゼンテーション（14時00分～16時30分）

- ・団体からの発表
- ・委員からの質疑応答

①あさおホッププロジェクト！みんなでつくるグリーンカーテンのまち（あさおホップ実行委員会）

【講評・主な質疑応答】

（委員）

先日の報告会では、ホップは2階まで育つという話だった。今回の説明の中で、ネットを上手く使うことによって、手が届くところで育てられるようになるのではないかと感じたが、今後家庭で小型に育成できる可能性はあるのか。

（提案団体）

家庭でやる場合、手すりにひもやネットをつなげると簡単にできる。

（委員）

2階に行かないと毬花が取れないという話を聞いていたので、2階建てでないと育てられないイメージだったが、今日の説明を聞いて、色々と工夫をすれば、2階がない家でもできるということが分かって良かった。

公共施設や人通りの多い場所でやりたいとのことだが、現時点で実現可能性はどのくらいあるのか。

（提案団体）

申請書を提出した時点ではどうなるかわからなかったが、その後、昨年度オープンした五月台駅前の店舗については、テナントビルの理事会を通して了承をもらい、ホップ畑についても了承を得ており、実施できる見込みである。

（委員）

この事業は、今回の市制100周年及び全国都市緑化かわさきフェアにとっても適しており、期待が持てる内容だと感じている。今年は市民提案型協働事業として3年目ということで、集大成として進めてほしい。少し気になる点として、今の説明の中では収穫の話ばかりだった。タイトルにあるように「みんなでつくるグリーンカーテンのまち」ということなので、いかにこのグリーンカーテンのまちを創り

上げていくかということが大事である。要するに収穫というのは、とても効果はあるとは思いますが、あくまでも参加者の皆さんには「グリーンカーテンをつくる」ということを全面に出し、グリーンカーテンをつくる過程をみんなで楽しみながら取り組んだ結果として、収穫があるという形で進めてほしい。それが市制100周年・緑化フェアにつながると思う。育成の仕方が課題だと思うので、代表の力で、メンバーにも協力を要請できるように取組をしてほしい。

(委員)

根本的に、ホップは興味を湧かせるということでは良いが、事業目的にグリーンカーテンとか、緑が減少しているとか書かれているところを見ると、ホップ以外ではダメなのかという疑問は感じている。最初は、もっと簡単なヘチマやひょうたんからステップアップしていく方法もあるのではないかと感じている。

昨年度の収穫量ってどれくらいあったのか。

(提案団体)

去年、自宅で収穫できた方は、約半数。グラムではわからない。メンバーから育成したものを集めることはしていない。

(委員)

今年度は昨年度と比べてどれくらい増えるのか。例えば、収穫量が昨年度10kgであれば、今年度は20kgにしたい、または昨年度、参加したのが40家庭であれば、今年度は80家庭にしたいなど数値目標を教えてほしい。

(提案団体)

収穫量は分からないが、メンバーの数については、去年は20～30人。昨年までは5月と6月に告知を出して、説明会を実施して、その時期に集まった人のみがメンバーになっていたが、今年は始まってから11月の終わりぐらいまで、途中参加だと株は育てられないものの、いつでも参加できるようになる。今年は去年の1.5倍～2倍の参加者を予想している。

(委員)

年々やっていけば増えていくとは思いますが、数値的な目標は、予算の積算をする際にもあった方がよい。

あと参加したメンバーが、その後支援する側にも回るというのはとてもいいと思った。

収穫イベントもやるとのことだが、その経費が入ってないように思う。その辺りを教えてほしい。

(提案団体)

計上していない。一つ一つのイベントで参加費を設ける。柵やステンレスパイプも、参加費で回収できるようにしたい。

(委員)

参加費をもらいながら行うという形か。

(提案団体)

その予定である。

(委員)

まさに緑化推進と新たなつながりづくりを目指した取組であり、評価できる。特に重要なところについてはホップを通じたつながりづくりというところで、去年の提案資料を見ると、目標が40人だった

が、現在43人ということで素晴らしい成果だと感じている。

これは意見だが、先ほど他の委員の話にもあったが、ホップは魅力的なものなので、そういったものを通じて、多くのネットワークを形成していけるよう引き続き取り組んでほしい。

やっていることを見てもらうのが一番で、今回新たに人通りの多い場所で展開していくということだが、実際に管理に関する課題があると思うが、その辺はどのようにクリアしていこうと考えているのか。

(提案団体)

メンバーからも、私がどんどん育成場所を増やすからついて行けるかという不安の声はあるが、店舗も共同畑も私の家からも近い距離であり、湧水がすぐ近くで出ていて、水やりもしやすいので、今年は私が体を張ってやりたい。雑草取りなどもっと大変なものをメンバーの皆さんと一緒にやっていきたいと考えている。

(委員)

店舗でやるととても目立つと思うので、ぜひPRも積極的に取り組んでほしい。

②「テクテク」で「健康増進」＋「子どもサポート」(かわさきドリームアップ応援隊)

【講評・主な質疑応答】

(委員)

地域包括ケアシステムの自助のところを意識しながら、何かやっているだけで、互助のところにもつながっていくというのはとてもいい話だと思う。もっと広げるために、今回提案だけでなく、こんな風にしたいということがあれば教えてほしい。

(提案団体)

まずは麻生区で実証実験みたいな形を考えているが、そこから麻生区発で、市全体に広げていきたい。運用の仕方も、こちらがこなれてくれば、参加者からのこういうコースをやりたいという声に応えて、それをやっていく。歩くことで、コミュニティづくりを行うのと併せて、子どもたちとの連携も意識することで、活動を広げられるのではないかなと思うので、まずは面の広がりを考えたい。

(委員)

ある程度チームメンバーが既に出来上がっているのではないかなと思う。説明会3回に対して、3回歩くということだが、参加した人たちがコミュニケーションをとって仲間としてやっていくというのに、これだと1回しか会わない人もいる。なぜ毎月定例にやらないのか。また1時間歩くというのは、結構ハードルが高い。先ほどの説明では、体操もやりながら行うという話もあったが、それならチラシにも書いた方がいい。1時間歩くのは結構大変でも、例えば15分体験として地域を歩いて、毎月参加しましょうとすれば、次につながっていくと思う。やはり1人でやるのではなくて、仲間と一緒にやるというのは、年1回会うだけではできない。麻生区全域の人が1カ所に集まって行うのは、非常に難しいと思うので、例えば新百合ヶ丘拠点、百合ヶ丘拠点とか3つぐらい拠点を作って、各拠点のチームメンバーを決めておき、拠点ごとに20人ずつ集める。またその20人が、その地域で活動するようにしたら良いと思う。それをアピールしていくと、次は違う場所で徐々に広がっていく。そのような形が取れないかなと思うが、今後の構想を教えてほしい。

(提案団体)

説明会も会場の関係で、市民館等を考えているだけで、あくまでエリアを決めているわけではないが、ここを中心にして活動しようということは当然考えている。説明会は3回、その後のウォーキングコースも3回を予定している。説明会に参加した人がウォーキングに1回しか参加できないわけではなく、説明会は3回同じ内容をするので、1回説明会に参加した人が、ウォーキングに3回参加することも考えられる。説明会の参加者は20人と想定しているが、ウォーキングの方は最大で60人ということもあり得る。現実的に捉えきれていない部分があるが、地域のチームリーダーに実施内容を伝えて、お願いすることで活動を広げていくことはできると思う。

(委員)

これからお願いするのではなく、メンバーの中で、このチームはこの拠点をやるというところ位まで作っておいた方が確実性はあると思う。また、提案書に麻生歴史観光ガイドの会とかさまざまな団体と一緒にやると書いてあるが、打診は済んでいるのか。また具体的に何月頃実施するなど、各団体との交渉は進んでいるかを伺いたい。

(提案団体)

私が所属している団体に関しては、市民提案型協働事業に提案するので、形になったら協力してほしいとアナウンスしている。あと麻生歴史観光ガイドの会も、リーダーの方とは話しており、こんな形でできるのではないかとこのところまで話し込んでいる。

(委員)

TEKTEKを利用して、学校に給付するポイントについて、参加者が寄付先の学校を指定するのかなど。寄付先については、麻生区内の学校でなくてもいいと思う。また、子どもサポートということにおいては、提案書に学校訪問をするとしているが、前段階で何か検討することがあるのかどうか。

また先程、市制100周年に関連した取組や麻生歴史観光ガイドの会との連携で、具体的にアイデアがあれば、教えてほしい。

(提案団体)

麻生区の小学校への寄附についてだが、個人の方が区ごと、その後の区に所属する小学校を選ぶことができる。例えば、100ポイント持っているとする、麻生区の小学校に20ポイント寄付して、残りのポイントは他の区の小学校に寄付するなど、参加者が個別に選んで寄付ができる仕組みになっている。

麻生歴史観光ガイドの会に関しては、ざっくりとした話はできているが、100周年に関しては、コースやポイントを私の方で絞り込む作業が必要になってくるので、観光ガイドの方やリーダーとかも含めて、これから開発していく段階である。

子どもとの関係については、アプリ上で小学校にポイントを寄付するというだけで、実際の接触がない。できれば今年度中に学校側の許可を得る必要があるが、おじさんやおばさんたちがこんな活動して、こんな風に学校に反映されているのだと分かるように、学校側と協力して実施したい。それにより参加者側の意欲向上にも繋がるのではないかと考えている。

(委員)

多世代交流的な要素も入れた方が、参加者が多くなると思う。また子どもたちも一緒にやることによって、自分の学校に恩恵があることを理解できるという点が非常に面白い内容になると思ったので、そ

んな取組も併せて考えてもらえれば、この事業もさらに参加者が多くなると思う。ぜひ検討してほしい。

(提案団体)

承知した。

(委員)

参加人数が20人ずつを想定しているとのことだが、昨年度の別事業の参加人数などを見ると少ないので、心配している。チラシを2500部作成し、PRすることだが、昨年度の実績を踏まえて、注意している点や20人まで確保できるのかという部分の確認をしたい。

(提案団体)

昨年度は、別事業を中原区・高津区・宮前区で区ごとに実施していた。範囲が広い分、力が分散されて、広報が上手くいかなかったのが昨年度の反省点である。それを踏まえて、麻生区で集中して、他の団体としっかり連携を取りながら、進めていきたい。

③2024認知症啓蒙促進活動 in 麻生区（おれんじあさお）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

キャラバンメイト養成講座を修了した卒業生は、現在も色々な活動をしているのか。

(提案団体)

おそらく介護事業所で働くなど色々な方がいると思う。認知症養成講座の講師をやるのは、交通費は出るが、あくまでボランティア活動なので、主婦(夫)の方や仕事を持っている方もいると思う。

(委員)

認知症サポーター養成講座というのは区がやっているのか。

(提案団体)

区ではない。どこが実施しても構わない。

(委員)

今は、おれんじあさおの団体として、講座をやっているのか。

(提案団体)

やっている。

(委員)

自分の団体でやっている認知症サポーター養成講座を終わった人が、メイトになるのか。

(提案団体)

メイトはキャラバンメイト養成講座を修了した人。市が主催で年1回実施している。

(委員)

キャラバンメイト養成講座とこの認知症サポーター養成講座は関係ないのか。

(提案団体)

あまり関係ない。卒業生として、メイトの資格を持った人が、私たちと一緒にやって、講座を開いてもらう。

(委員)

そのメイトを増やしていったって、色々な所で養成講座をやりたいということか。

(提案団体)

おれんじあさおの活動としては、やっていきたい。但し、今回の提案はそれではない。認知症養成講座自体はおれんじあさおとして行うが、今回の提案はそれを拡張していくために何をしなければいけないかという辺りを、区と一緒にやりたい。

(委員)

区と一緒にやりたいということだが、区と話をして、一緒にやろうということになっているのか。

(提案団体)

区と1回打ち合わせした。

(委員)

大人から小学生まで、みんなに認知症というのはこういうものだとして理解してもらうことが重要なのか、そういうことを理解するための講座に参加する人を増やしていくことが重要なのかどちらなのか。

(提案団体)

基本的には前者だと思っている。例えば中学生だと、ある程度「人権」ということを理解できるので、人権講座という形で行うケースもある。また小学生だと、多摩区では、全小学校の4年生に毎年、認知症サポート講座をやっている。特に最近は、核家族化が進んでいるので、近くに祖父母がいないとかで認知症を意識している子があまりいない。しかしながら、小学生に伝えてわかるかということ、実は分かる。逆に感性が高いので、どういう風に気をつけなくてはいけないかということだけで、理解してくれる。そのような気付きから、認知症だけでなく、共生という認識を持ってもらうという目的で養成講座を行う。

(委員)

この提案は認知症サポーター養成講座の実施になるのか。

(提案団体)

違う。

(委員)

映画を通じて、認知症の理解を進めるということか。

(提案団体)

それは提案事業の3つの内の1つである。

(委員)

今回の事業の助成金は、映画上映がメインではないのか。

(提案団体)

20万申請していて、その中の10何万を使うのが、3つ目の映画だが、それ以外の2つの提案事業についても、助成金を充てたい。

(委員)

ということだと、認知症サポーター養成講座をするという理解でいいのか。

(提案団体)

認知症サポーター養成講座をするためのネタ作りをする。

(委員)

その辺りの理解が難しいと感じる。介護人材が不足している中での取組としては、とても重要な提案だが、もう少し提案を整える必要があると思う。養成講座を進めて、何人位養成していくのか、その養成した方がどういう形で認知症の理解に取り組んでいくのかなど、この事業が助成金を使って、どのように取組を進めていくのかということが分かるような形でまとめた方が、理解されやすいと思う。

また、市制100周年との関連についても教えてほしい。

(提案団体)

事務局からも確認があったが、市制100周年及び緑化フェアとは全く関係がない。

(委員)

提案の①についてだが、キャラバンメイト連絡会というのがあり、キャラバンメイトの方が指導する時に、色々な情報交換をして、質を高める工夫がされていると思うが、まさにこのモデルパターンを作ることが連絡会の所掌事務のように見え、行政との被りがあるように見えるのだが、その点について何か意見はあるか。

(提案団体)

連絡会は年2回している。その中でパターンを深掘りして、ディスカッションまですることは難しい。逆に連絡会の中の分科会という形で、こういうことをやれるのであれば、そこでやればいい。もっと深掘りするためには、色々な人と有識者が何度も話をする必要があると思い、この事業を提案した。

(委員)

モデルパターンをおれんじあさおが作るとのことだが、その辺の経費は入っていない。おれんじあさおのマンパワー的に、パワー不足が懸念されるが、モデル作りはあまり経費をかけずにできるのか。

(提案団体)

認知症サポーター養成講座のモデルパターンの作成には、5～10人は集まると思う。その方々の交通費だけ計上している。

(委員)

提案書で次のステップに向けて、色々と準備をするところがあるが、実際に現場見学や研修はやらないが、その内容を作り上げるという理解でいいのか。

(提案団体)

麻生区にはこういったものがあるということをメニュー化して、公にみんながそれを使えるような器を作りたい。

(委員)

例えばこんな事業所があるとか、現場見学の候補はいくつかあるのか。

(提案団体)

初年度である昨年度は、まだモデルとしてやっただけで、1つ2つぐらいしかなかった。それを展開する素材はある。

(委員)

事業の見積書を見ると、映画の上映会を行う経費がかかるのが、それ以外については、今やっている活動の中で、提案内容について対応できるということか。

(提案団体)

今やっているものを拡張していく。助成金の提案としては、私たちの6つの既存事業とは別口で組み立てるように話があったので、このような提案としており、おれんじあさおが実際に認知症サポーター講座を行うが、今回の提案はそのコンテンツと一緒に考えるという企画的な部分だけを出している。

(委員)

認知症サポーター養成講座は別に助成金を取って、運営をしているということか。

(提案団体)

そのとおり。

(委員)

当然その講座やることについては、別の業務としてやっていて、プラスアルファのところについて、今回の提案をしているということで間違いないか。

(提案団体)

そのとおり。

(委員)

映画上映会についてだが、ゲストスピーカーの交通費と書いているが、もう少し色々なところと連携して、「とうきょう認知症希望大使」の方であれば、交通費とか安価で、色々な話もできると思う。また、チラシ500部では少ないのではないかと思ったので、その辺りで計画がどうなのかと少し心配になった。ぜひ始める際には検討してほしい。

④親子でサイエンス！地域の食と農（明治大学学生農場）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

事業見積書の支出で「学生アルバイト」と記載があり、団体概要書に会員数20人となっているが、その会員の20人が、支出にある学生アルバイトになってはいないか。もし会員の20人が関わるのであれば、あくまで交通費であり、アルバイトというのはそれ以外のメンバーが当日やってきて、講師のサポートをするということかということを確認したい。

(提案団体)

明治大学の学生農場の会員には交通費が出るが、それ以外は発生しない。学生アルバイトというのは、会員とは別に学生を雇うという形になる。有志で集まっている団体なので、会員には交通費しか発生しないが、人手が足りないので、それ以外で手伝ってくれる人を想定している。

(委員)

人件費率が61.5%あるので、結構大きいと思う。その中で、黒川農場というのは、明治大学以外の方がやっているのか、それとも明治大学がやっているのか。

(提案団体)

黒川農場は明治大学がやっている。

(委員)

この任意団体は、黒川農場を使っている大学のサークルのようなイメージか。

(提案団体)

サークルという少しイメージが違って、なぜ黒川農場を使えるかというと、顧問として教授がついており、顧問がこの団体をバックアップしてくれているので黒川農場を使える。

(委員)

学生団体が農場を使わせてもらっているというイメージなのか、それとも農場がこの提案をしているのか。

(提案団体)

農場がこの提案をしているのではなく、学生が農場を使わせてもらっている。

(委員)

そうすると学生が農場を使わせてもらっているのを、NPOにすることか。

(提案団体)

学生農場はプラットフォームであるので、その内の1つの活動である。

(委員)

これは農場の活動になるのか。

(提案団体)

農場の活動にはならない。農場と提携して行う。

(委員)

その関係性がわからない。学生団体が農場を使わせてもらって、それに対しての提案だったら、すんなり行く。ただ、これが明治大学や教授の話も出てくると、その辺りの整理が少し難しい。

(提案団体)

農場を使わせてもらっているというのは間違いなくて、そこに金銭的な何かが発生しているとかではなく、借りているという感じである。

(委員)

例えば、今の任意団体に他の大学の人とか市民を入れるのか。

(提案団体)

許可が下りれば入ることはできると思う。

(委員)

その許可はだれがするのか。

(提案団体)

許可は、教授が直接農場に問いかけて、OKとなれば借りられる。

(委員)

そうすると教授と皆さんの学生団体の関係はどんな関係なのか。

(提案団体)

教授と学生という立場である。

(委員)

教授は、その団体に入っているのか、いないのか。

(提案団体)

入っている。

(委員)

承知した。

(委員)

近隣の農家の方々と協力して進めていく取組はあるか。

(提案団体)

昨年度の3月末に黒川の方々とは、昨年度の振り返りも含めて、今年度どうしていくのかと話し合いを行った。その際には生産者の方にも来てもらい、体制を整えば、時期的な問題もあるが、受け入れるとは言ってもらっている。

(委員)

この事業に参加する人は20人ということで、1年かけて単発ではない農業体験できるということは有益だと思う。地域に出て、地域の農家さんとかと多世代交流もできるということの事業効果は、大変評価できるが、20万円の負担をして、受講者が20人ということで少し効果が限定的であると感じる。例えば、学生アルバイト代が12万ということだが、学生がこういった多世代交流に参加することで、得るものというのは、金銭に代えがたいものがあると思う。アルバイトとは次元が違う受益があるということで、例えばもう少しこのアルバイトの単価を下げ、参加者を増やす方向に事業費を工夫する可能性があるかどうか教えてほしい。

(提案団体)

私たちは、交通費が出るだけで金銭的なものは受け取っていない。内訳の10時間というのも、連続で10時間やっているわけではない。3時間位で作業が1回終わるとして、3回来てもらうことを想定している。大学から黒川や岡上に行くのが往復400円ちょっと。それが計3回というので計上したのだが、確かに人件費の比重が大きいので、そこは今後NPOが立ち上がって、学生農場の会員が増えてくれば、その分は減るので、下げていこうとは考えている。

⑤麻生区の大学間連携による“川崎市市制100th記念”岡上プロジェクト（特定非営利活動法人岡上アグリ・リゾート）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

共同授業の会場はどこなのか。

(提案団体)

学生に岡上地域の自然を肌で感じてもらう方がいいと思い、教室でやる事業ではなく、畑やワイナリーに実際に足を運んでもらうことを考えている。麻生区を知ってもらうことにつなげたい。

(委員)

これは毎回同じ学生が来ることを想定しているのか、それとも別々になるのか。また人数はどれ位の規模までできるのか教えてほしい。

(提案団体)

全ての大学から、人数を決めずに希望者を募集したいと考えている。畑はヘクタール単位であり、マイクも準備しているので、学生数は問わずに募集したい。また、提案書の中に書いたが、一般の方も

一緒に参加してもらいたいと思っている。但し、一般の方は人数制限をかけて、1回15人としたい。学生は無料で参加できるように考えている。

(委員)

お酒が飲めない人にワインというのは、どのような形で伝えていくのか。

(提案団体)

明治大学の中でもワインを作る事業をやっているが、未成年がすごく多い。未成年は集まらないかと思っていたが、実際にはたくさん集まってくれて、ワイン＝記念のものという感覚があるということだった。学生たちから言われて、一番心が痛いところというか私自身も反省したが、「大人のお酒の飲み方は汚い」と最初の授業で言われた。ワインに関しては、記念のときに飲むものという感覚があるので、そこには希望を持っていると言われた。その時に自分が飲むのではなくて、両親や友人にお祝いの時に贈るために活用できるということで、ワインを飲まない人でも取組としては成立しているのだと思う。他の農作物をテーマにしても良かったが、今まで農業に目を向けてくれるのは、高齢者が多く、今まで目を向けてない若い世代の人たちに目を向けてもらう必要があると思っており、その発信力がワインにはあると思う。また、川崎市はワインの製造に関する構造改革特区として、内閣府から承認を得た。これは川崎市としても、農業の起爆剤としてワインを活用したいということで承認が下りた。それも併せて、ワインをテーマに選んだ理由である。

(委員)

例えば、地域の方と連携して、チョコレートとワインで何か作るとか、福祉と農業とワインのコラボとか、ワインだけでなく、もう一押し岡上らしさが欲しい。

(提案事業)

大学の中でも、特に福祉分野に関しては田園調布学園大学と農福連携を進めていきたい。田園調布学園大学は、麻生区の特徴である自然を活かして、自然の中で農福連携を進めていきたい気持ちがあったが、学生がニンジンや大根栽培では集まらず、どうしたらいいかと考えていた時に、ワインであれば学生たちが興味を持って参加したいということがあった。それで今年度は、田園調布学園大学も福祉の面で、連携して進めていく。これは大学からも資料提供されているが、2000年の沖縄サミットの晩餐会で提供されたワインを作っている「ココ・ファーム」は、福祉のために作られた日本を代表するワイナリーである。農福連携として一番成功している事例が、ハーブであるとよく聞くが、実はワイナリーが成功事例として30年～40年続いているので、期待をしている。福祉の部分では、田園調布学園大学の学生と農業・ワインと組み合わせて、どういう農福連携の形ができるかということをこれから詰めていきたい。これから構造改革特区でワインが販売できるということを秋頃発表できると思う。そうすると飲食店であったり、ワインのアルコールを飛ばして、ケーキに加えたりするなど、これから進んでいく分野だと思う。

(委員)

農福の関係を、ワインを題材に上手く連携が取ればいいと思う。ぜひそこに麻生区社会福祉協議会や高齢者も加えて、一緒に取組を今後考えたい。

(提案団体)

麻生区社会福祉協議会とも連携したいと思っている。麻生区を平均寿命ではなく、健康寿命が長いまちにしたい。そこには定年退職した後に、周りに関わらず、1人で家にこもっている人たちをどう外に

出すかというところが課題になっていると思う。その部分で現在、私のところには高齢者がブドウ作りにたくさん足を運んでいて、健康維持のためにやりたい。またこれを栽培したら、飲めるまで元気でいたい。そういう気持ちになる人も多くいる。私のワイナリーの生徒が600人いて、半分は高齢者である。健康維持のためにやりたいという話があるので、農地法の関係もあるが、高齢者が農場で働くことができる仕組みの導入を検討していきたい。

(委員)

福祉の関係でそういったPRができるようになれば、あさお区民まつりに限らず、11月のあさお福祉まつりでもぜひPRして、農福連携の関係をPRする機会の提供はできると思うので、ぜひ一緒にやっていきたいと思う。

(委員)

麻生区の大学共同授業ということで大変嬉しい提案で、区役所も行政と大学が連携して物事を進めて、課題解決につなげていくということをやっているのだが、各大学と行政の2者の取組や大学同士とそこに行政が加わって3者での取組となっている。今までにない価値を生み出すような取組ができると一番良いと思う。せっかく3回も各大学の学生が交流をして、取り組むので、今後の調整の中では、それぞれの大学の強みと農業の掛け合わせだけではなく、大学間との連携も含めて検討してほしい。

(提案団体)

行政としてもなかなか大学間を連携させて1つのことをやるのは、難しいことだったと思う。こちらから声をかけたのではなく、全ての大学から一緒にやりたいとって集まってきた。魅力が何かあったから、一緒に取り組んでいると思うので、まずは興味を持ったものを一緒にやって、次年度からは、この取り組んだものに対して、大学間で一緒に取り組めるものを増やしていけるよう模索していきたい。

⑥Miraiall かわさき

「健康」をテーマとした多世代共考プロジェクト（一般社団法人 Miraiall かわさき）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

具体的にどこで何人集めてやる予定なのか。基本的に多摩線沿線で行うのか。

(提案団体)

私たちの事業所が栗平にあるので、その場所を使うこともあるが、中心は区役所や市民館、21ホール、しんゆりフェスティバル・マルシェで、多摩線沿線に限定はしていない。

(委員)

多摩線沿線限定なのかという感じがしたが、麻生区全体でやるのがもちろんベターだと思う。全域でやる場合、広報の仕方やどれ位の規模感でやれるのか。区内の色々な拠点で、同じように子どもや高齢者対象のさまざまな市民活動団体があるので、そういう団体をどのように取り込んで、連携していこうと思っているのか。それとも自分たち独自でやっていくのか教えてほしい。

(提案団体)

Miraiallはさまざまなママさん団体と連携してきた実績があり、団体の皆さんと交流があ

るので、親和性のある事業というのは、そこで掛け算することによってシナジーが生まれると思っているので、決してゼロベースでやるというものではない。そこに先ほど言ったSOERUTEの事業で、1,000人の登録が既にあり、やはり重なっている部分がたくさんあって、ここでしかやらないということはない。色んな団体が重なっていくことによって、規模としては、市民館を満員にするぐらいの気持ちでやらないといけないと思っている。実際に高津市民館に550人を呼んでいるので、これぐらいの規模で、柿生第3地区だけでなく、麻生区全体で活動をしていく。

(委員)

人数が多いのはいいが、地域の中での継続性を考えた時に、やはりMirai11だけでやれないということもあると思う。地域の市民活動団体と連携することによって、子どもから高齢者の支援団体まで色んなところでつながることができると思うので、既に連携している団体もあると思うが、新しく育ってきている団体も麻生区にはたくさんあるので、そういう団体と連携するつもりはあるか。

(提案団体)

子育て世代のママさんはパワフルで、地域の活動を色々しているのだが、なかなか高齢者と一緒にやる機会がなく、どのようなふうにして、どういう方にアプローチしたらいいかというのが分からず、なんとなく子ども向けのイベントに特化していた。しかし先日、落語を見た時に、これは高齢者も楽しんで、子どももかわいいということもあって、こういうことが多世代交流の一步だと思った。SOERUTEには、たくさん的高齢者が集まる地域交流室があるので、そこを使って、高齢者とママと子どもが関わるイベントを定期的を開催することによって、孤独で子育てをしていて、何か相談したいとか、そういう場所を探していたりするママたちに交流の場づくりをできればいいと思っている。市民提案型協働事業でやることにより、既に活動している高齢者施設の方とも一緒に多世代交流を積極的に行い、区役所前広場でも11月に開催したいと思っている。

(委員)

健康増進と多世代交流を進めるというのはすごく共感できる。麻生区社会福祉協議会としても、特に多世代交流を心がけながら事業展開を考えているところではあるが、今回話を聞いている上で、助成金を使って、イベント等を進める醍醐味が理解できない。Mirai11の持っている力があれば、助成金を使わなくても、自前で全部できると感じる。助成金だからこその部分のアピールがなかったように思うので、その辺りを教えてほしい。

(提案団体)

イベントにお金がかかるのもあるが、麻生区社会福祉協議会や区役所と連携することに意味があると思って、この市民提案型協働事業に応募したのもある。Mirai11だけで民間団体として、企業の協賛を巻き込んでやれてしまうイベントもあるが、そうすると営利になってしまうことがある。しかし、この市民提案型協働事業であれば、助成金を有効に活用しながら、官民連携で区役所や麻生区社会福祉協議会と接点を持ってやることができるという観点で応募した。

(委員)

健康をテーマにした多世代共考プロジェクトということで、素晴らしいと思う。まさに、麻生区が昨年5月に平均寿命日本一という発表があり、地域の方と喜び、色んな活動を評価しながら、現在に至っている。やはりその先ということを考えていく中で、健康寿命を延ばす取組はこの間もやってきたわけだが、日本一になってさらに拍車がかかって、頑張ろうとなっていて取り組んでいる。まさに健康寿命を

考えたときに、やはり健康というのは高齢者になってから維持しようと思っても、なかなか難しい面もあり、色んな医師に話を聞くと、子どもの頃からの骨作りがとても大事で、骨格ができるタイミングでいかに健康を意識して、しっかり栄養をバランス良くとっていくかということが、非常に重要である。そういう意味で、この提案にある全世代が健康をテーマにして、交流しながら、啓発していくということは非常に素晴らしいと思っている。よく麻生区で提案してくれたと非常に喜んでいる。

11月のイベントについては、私も昨年度の事業を見ていて、発表内容のレベルが高くて驚いた。今回はステップアップということで、昨年度の経験を踏まえて、さらにその上の部分での提案というのを当然期待しているところだが、今回のメニューの中でステップアップにチャレンジしている部分があれば、具体的に説明してほしい。

(提案団体)

イベントをやるとなると、知ってもらおうというところが最初にあるが、次に今回私たちが提案している「共に考える」という段階になった時に、健康が大事である、運動が大切であるということを伝えて、その場でアンケートを取れば、意識変容は取れるが、継続性が難しいと思っている。例えば、NECソリューションイノベーターの方の話を聞くと、イベントの前後でのアンケートをすることによって、行動変容・意識変容は取れるが、1年後にそれが継続しているかという、なかなかそれができていないのが現状。NECのような大企業が色々なことやって、啓発してもそうなる。私たちにとって、ステップアップというのは、新しい方がイベントに参加してくれるのもその一つだと思うし、健康を意識した人が何を变えたのかも重要だと思う。例えば、子どもが健康のことを考えて、歯を磨くようになったという親御さんのアンケートが以前あった。これは行動が具体的に変わって、継続している。イベントの後、次にどのようにつながっているかまで追っていかうと思う。それで年度を追うごとにアンケートの工夫をすることにより、その変化を定量的に計れて、ステップアップにつながっていくと思う。

(委員)

地域活動とソーシャルビジネスと会社の経済活動の3つの観点で聞いていたが、そこが少し混ざってしまっている部分があると感じた。例えば、SOERUTEであれば、地域交流スペースのところを今回の費用で賄ってやって、それで今回の助成金を取るのであればすごくわかりやすいと思う。SDGsもあって、SDGsでも100万円の助成金が出ているのに、なぜこの麻生区の市民提案型協働事業の助成金をわざわざ取らないといけないのかという疑問がある。説明を聞いて、今まで麻生区でやっていないところを、SOERUTEと一緒にやっていくという部分はわかるが、そこの整理をした方がいい。

例えば、チラシの作成で16万円位計上しているが、印刷枚数とデザイン費を教えてください。

(提案団体)

チラシ作成の件に関しては、ママさんクリエイターにお願いして、1デザインA4両面で8万円。それを2回作成する。15,000枚のチラシを2回配布する予定で経費を計上している。

(委員)

経費のところを聞くと、市民地域活動よりも少しCSRに近い形になっていくのかなと感じたので、もう少し整理されていると話が聞きやすかったと思う。

以上